

Episode 1

そのお母さんは一瞬かたまり、口をあんぐりとしていた。ものすごく戸惑っている様子だ。こんな人に我が子を任せていいのか？ という迷いが顔に滲み出ていた。

私は玄関に立って笑顔で挨拶をしたのだ。今日は新しく受け持つ生

徒さんの面接の日だった。小田悠人君、十四歳、中学二年生だった。おだはると

私が小田家を訪ねて来て、すぐに母親が出てきた。その母は私を男だと思っていたらしい。しかし訪ねてきたのは若い女の子だった。それでびっくりしているのだ。

知り合いのつてで家庭教師をお願いされたのだが、その時は私の本名、つまり男名前で話が伝わったようだ。それは普通なのだが、実は女装男子だったというわけだ。しかも自分で言うのも何だが、パス度の高い女装男子だ。

女装したまま女子トイレに入っても全く違和感がなく、疑いの目で見たことは一度もなかった。それで私はすっかり自信を持ってしまうのだ。

「あ、あの、男性だって聞いていたんですけど……」

悠人君のお母さんは言った。私の本名は堺圭祐、二十四歳。その名前を聞いたら、男性だと思うのも無理はない。悠人君のお母さんは私が女装子だということまでは聞いていないのだ。

「はい、堺です。本名は堺圭祐ですが、今は美並サキです。美並サギじみなみやありませんよ。サキです。よろしくお願いします」

私はいつものジョークを言ってお母さんを和ませた。バッグの中から名刺を出してお母さんに渡した。そこには女装名で「美並サキ」と書いている。

「お母さん、私がこんな恰好をしてるのでビックリされてますよね。その理由をこれからお話しますから、お邪魔してもいいですか？」

「あ、あ、はい、どうぞ」

悠人君のお母さんは我に返ったようにそう言って、私にスリッパを出してくれた。家は大きい中流家庭のようだった。お母さんは私をリビング

に案内してくれた。ソファに座って待っていると、お茶を淹れて私の前に置いてくれた。

「では早速ですが、なぜ私がこんな恰好をしているのかと申しますと……」

私は家庭教師を二年やっているが、最初の頃は普通に男の恰好でやっていたのだ。しかし受け持つ生徒さんが、なんだか私に馴染めず、勉強に身が入らないのだ。結果志望校には行けないというケースが多かった。

そこで私は悩んだ。どうしたら中学生の子供と打ち解けることができるのか？ 大学時代から私は女の子に変身するのが大好きで、それもかなりのクオリティの高さが自慢だったのだ。これを生かさない手は

ないと思い、思い切って女装男子で生徒の前に現れたのがきっかけだった。